
姫 > 勇者

keita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫>勇者

【Nコード】

N5622Y

【作者名】

keita

【あらすじ】

「ある事がきっかけで弱気な性格になった少年と、ある事がきっかけで強気な性格になった少女の物語」

初めて書く作品です、多少の読みにくさなどは勘弁してください。投稿は不定期です、根気よくお付き合いを。

誤字や物語についての意見など感想お待ちしております、どんなささいな事でも。

物語説明

登場人物紹介

〔敬太（9歳）〕

かくれんぼで鬼役をしていた男の子、森に入って野犬に襲われたエステルを助ける、その時エステルと大事な約束を交わしエステルを守る勇者になった。

〔エステル（9歳）〕

かくれんぼで隠れる役をしていた女の子、敬太の言う事を破り森に入ってしまった野犬に襲われているところを敬太に助けて貰う、この時敬太と大事な約束を交わす。

その他

〔森〕

迷いやすく、野犬などが出る場所。エステルが迷い込んでしまう。

第0話 プロローグ (約束) (前書き)

この小説にでてくる団体などはリアルと関係ありません！

第0話 プロローグ（約束）

「いいか、捜すの大変だからあまり遠くに隠れないこと、あと父さんが森は迷いやすいし最近野犬が出て危ないって言ってたから絶対入っちゃダメだからね、わかったエステル？」

「うん、わかった」

「じゃあ初めようか」

「うん、じゃあ最初は敬太が鬼ね、今回は絶対に見つからないからね」

「大丈夫、いつも通りすぐにみつかるから、じゃあ二十数えるから隠れて」

そう言い十歳くらいの年頃の男の子がその場でしゃがみ、目を手で覆い数を数え始めた、どうやらかくれんぼをしているみたいだ、鬼役の男の子が数を数え始めるとかくれる役の同じ年頃の女の子はたった今男の子に入っちゃダメと言われた森の方へ一直線に走って行った。

「まさか森に入ったとは思わないよね、敬太が鬼の時いつもすぐに見つかったちゃうから今日は絶対に見つからない所に隠れるぞ」

そう自分にしか聞こえないくらいの声で言い少し笑いながらさらに森の奥深くへ走って行った。

「二十、よし捜すか、どこに隠れたのかな、すぐに見つけてやるぞ」

数を数え終わった男の子はまさか言っただけで勝手に約束を破られるとは思わず森と反対方向に走って行った。

かくれんぼを始めて随分と時間がたった、始めた頃はまだ辺りは明るかったのが大分薄暗くなってきた、でも今だにエステルを見つける事ができずに、かくれんぼを始めた場所まで戻って来ていた。

「エステルー、エステルー、おかしいな全然みつからない、どこに隠れてるんだ？」

必死に捜しているのだろう額には大量の汗をかき、息をきらしている。

「いつもならエステルの隠れている場所なんて簡単に見つけられるのに」

近くの隠れることが出来そうな場所はだいたい捜したけど、どこにもエステルはいなかった、一度家に帰ったのかとも考えたがエステルは遊んでいる途中で一人で勝手に帰ってしまう様な自分勝手な子ではないからまずありえない、これだけ捜してもみつからない、頭の中は最悪の事態のことばかり浮かんでくる。

「エステルー！、エステルー！」

エステルを呼ぶ声に力が入る、ふとかくれんぼを始める前にエステルが言った言葉が脳裏を過ぎった。

「絶対見つからないからね」

「そう言えばいつもなら「だってすぐ見つかるもん」とか言って自信がなさそうな様子なのに今日は珍しく自信がありそうだったな」

その時自分が言ったある一言を思い出し背筋が凍った。

「まさか森に入ったんじゃ・・・」

振り返ると森は木々が風に揺らされ不気味な雰囲気を出していた。

まさかこんなことになるとは思っていなかった、最初はいつもすぐに見つかってしまっから今回はすぐに見つからないようにして敬太を悔しがらしてやるぐらいの気持ちのつもりだった、森の中に入っても来た道を辿れば抜けられると思っていた、だけど奥に進むとどの木も同じように見えて、来た道がまったくわからなくなってしまった。

「どうしよう、こんなつもりじゃなかったのに」

瞳に今にも溢れそうな涙を浮かべ顔を伏せしゃがみこんでいる。

「父様、母様・・・敬太」

微かに聞こえるかどうかくらいの声で三人を呼んだ。

「エステルー！、エステルー！」

一瞬遠くの方で敬太の声が聞こえた気がした。

「敬太！？、敬太ー！、敬太ー！」

立ち上がり大きな声で敬太の名前を呼ぶ。

「ガサ」

少し離れた後ろの草むらが大きく揺れた。

「敬太？」

ちよつとした安堵感と期待感が混じった顔で振り返る。

「ぐうー」

一瞬で体が凍りつき地面に腰をついた、草むらから自分より一回り近く体が大きい犬がとても低い唸り声を出しながらゆっくりと出て来た、暗闇の中眼は紅く光り鋭い牙を剥きだしにし口からはよだれを垂れ流している。

「うそ、まさか野犬？」

かくれんぼを始める前に敬太が言っていたことを思い出す。

「森は迷いやすいし最近野犬が出て危ないって言ってたから絶対入っちゃダメだからな」

(まさか本当に出るなんて)

後ろにじりじりと下がりながら思った。

野犬は徐々にエステルに近づいてくる。

エステルは手元に落ちていた木の枝を拾い野犬に向かって投げた。

野犬にあたり一瞬怯んだ隙に急いで立ち上がり走りだした。

「助けて、助けて、助けてー！」

息をきらしながら必死に叫ぶ、辺りはもう前が見えないくらいに暗くなっている、全力で走って逃げる、恐くて野犬が近くににいるか振り向いて確認することができない、でも後ろから野犬の鳴き声と息を吐く音が聞こえてくる、追いつかれない様に、振りきれる様子がむしやりに木々を避け草むらを掻き分けて走っていると森を抜けた。

「やった、抜けた！」

「ガ」

足元にあった石につまずいて大きくこけた。

「イタい！」

右の足の膝に激痛が走った、体を起こし膝をみると真っ赤な血が流れていた。

「ガサガサ」

後ろの草むらが揺れ、野犬がこちらを睨みながらゆっくりと出て来た、暗闇の中で野犬の眼が光る。

「そんな、嫌だよ、こっちこないで」

瞳から涙をこぼしながら消え入りそうな声で言う。

そんな言葉が野犬に通じるはずもない、じりじりと間合いを詰めてくる。

「嫌、こないで」

そして光る目が一瞬下に動いた、野犬は助走を付けて物凄い勢いで走りだした。

「嫌、嫌、こないで、助けて、助けて、助けて敬太ー！！」

「エステルー、エステルー」

森に入ってからどれくらいたったのだろう辺りは前が少ししか見えなくらいまで暗くなった、エステルの名前を呼びながら森を捜しているが一向に見つかる気配がない。

（もしかしたら森には入ってなくてただ僕が見落としているだけでまだ森の外に隠れてるのかもしれない）

その可能性に賭けようと森を出るため来た道を引き返そうとした時だった。

「敬太！？、敬太ー！、敬太ー！」

確かにエステルの声が聞こえた、声の大きさは小さかったからあまり近くにはいないが確かにエステルはこの森の中にいる、急いでエステルの名前を呼びながら声が聞こえた方向に向う。

「エステルー、エステルー、どこだー、聞こえてるのなら返事をし
てー」

耳を澄ませるが返事はない。

「確かに声は聞こえたのに」

焦りを感じ始めていたその時だった！

「助けてー！」

エステルの悲鳴にも聞こえる叫び声が聞こえた！

「エステル？、エステルー！、エステルー！、どこだー、どこだー」

血相を変えて声の聞こえた方に走り出した。

名前を呼びながら走っていると森を抜けた。

「クソ、どこにいるんだ」

汗を滝の様に流し膝に手を置き肩で息をする、乱れた息を落ち着かせよう大きく深呼吸をしていたら声が聞こえた。

「じつちこないで」

今度の声はさっきとは違いハッキリと聞こえた。

(エステルが近くにいる)

声が聞こえた方に向かう。

(う、眩しい)

月灯りで鮮やかな金色が反射している、エステルだ！

「エステル！」

エステルに近寄ろうとした時なにかがおかしい事に気づいた、あれだけ大きな声で名前を呼んだのにエステルは全くこちらに気づいてない、ただ前だけを見つめて何かに怯えている、エステルの前に視線を移す、そこには大きな犬がエステルの事を睨んでいる。

(まさか野犬?)

野犬は今にもエステルに向かって走り出そうとしている。

(ヤバイ!)

敬太は近くに落ちていた木の棒を拾い走り出した、敬太が走り出したのとほぼ同時に野犬も走り出した、野犬は見る見るうちにエステルとの距離を縮めていく、野犬がエステルの近くまで来て牙を剥き出しにして飛び付こうとした。

ギリギリ間に合った、敬太はエステルに飛び付こうとしている野犬に向かって思いっきり木の棒を振り抜いた。

「ガン！」

野犬の顔に木の棒は当たった。

「キャウン」

野犬は後ろに吹っ飛んですぐに立ち上がると走って森に帰って行った。

「はぁ、はぁ、危なかった、大丈夫エステル？」

後ろを振り向いた時だったいきなりエステルが抱き付いて来た。

「な、なにするんだよ」

引き離そうとしてもエステルは強く敬太の背中に腕を回して離れない。

「ったよ、怖かったよ、怖かったよ、怖かったよ」

涙声でエステルが言った。

「エステル」

僕はエステルを強く抱きしめた。

「大丈夫だよ、もう大丈夫」

「ごめんなさい、ごめんなさい、入っちゃダメって言われてたのに私森に入っちゃって、本当にごめんなさい、ごめんなさい」

「本当だよあれだけ入っちゃダメって言ったのに、でももういいよ、エステルが無事ならそれでいいんだよ、いいんだよ」

「うん、うん」

エステルが落ち着き泣き止むまで二人は抱き合っていた。

「落ち着いた？」

「うん」

「じゃあもう真っ暗だし帰ろうか」

「うん」

そう言って敬太はエステルの前でしゃがんだ。

「え？」

「足、怪我してるんだろ、おんぶするから乗って」

エステルの顔が真っ赤になる。

「いいよ、一人で大丈夫」

そう言っ一人で立ち上がるうとする。

「イタ！」

膝を押さえる。

「いいから乗って、それともまた僕の言っ事やぶるきっ。」

「え、うんわかった」

エステルは敬太の背中に乗った。

エステルの体はとても軽く柔らかな感触がした。

「重くない？」

「うん、全然重くないよ」

敬太は歩き出した。

少し歩いた所でエステルが言った。

「あのね、今日は本当にありがとう」

「別にいいよ」

「うん、それでね、聞きたいんだけど、またね今日みたいに私が危なくなったら助けてくれる？」

「え!？」

いきなりで少しびっくりした。

「嫌？」

「嫌じゃないよ、絶対に助ける」

「本当？」

「うん、本当」

「じゃあ私が敬太の名前を呼んだらどこにいても、どんな時でも助けに来てね、約束だよ」

「うん、約束する」

「絶対だよ」

「絶対約束する」

「じゃあ敬太は私の事を守ってくれる勇者だからね」

そう言つとエステルは嬉しそうに笑い僕の背中に体を任せ眠り始めた。

第0話 プロローグ (約束) (後書き)

読んでいただきありがとうございました！

面白かったかつまらなかったかはわかりませんがもしよかったですら気づいた事、誤字、ここをこんな風にするともっと面白くなるなど意見、感想などお待ちしております。

次を楽しみしてください！ ありがとうございます！

第1話 入学式の日の朝

「いた様、敬太様、敬太様起きてください遅刻してしまいますよ」

「う、うーん」

背伸びをしながら体を起こす、目を開けると目の前に友里の顔があった。

「おはようございます敬太様」

「おはよう友里・・・今何時？」

友里は左の袖をめくり腕時計をみる。

「只今の時刻は8時33分45秒です」

「・・・ってやばい遅刻しちゃっ！」

ベットから跳ね起きる。

「朝食の用意はできております、先に行っておりますので」

「うん、ありがとう」

そう言いメイド姿をした友里はこちらに軽く会釈をした、友里が部屋をあとにするのを見届けた僕は急いで寝着を脱ぎ制服に着替えだした。制服に着替え終わると朝食が待つ部屋にダッシュで向かった。

「おはようございます敬太様」

「おはようございます敬太様」

部屋に向かう途中で出会うメイドや執事に片手をあげ軽くあいさつをしながら走る。

いつも食事をする部屋の前に着くとそこには一人の男が立っていた。

「おはよう、じいや」

「おはようございます敬太様、朝食の準備はもうできております」

そう言ってじいやは部屋の扉を開いた、部屋の中はとても広々として中心にとても長いテーブルが置いてある、その一席に朝食が用意されていた。

「さあ急いで召し上がって下さい敬太様、今日は大事な日遅刻は許されませんぞ！」

「わかってるよじいや」

急いで席に着いて朝食を食べはじめた。

「バン！」

ものすごい音と共に部屋の扉が勢いよく開いた。

ビックリして扉の方に目をやる、

「まさかあなたまだ準備してなかったの!？」

そこには眩く光る金色の長い髪をなびかせ、見るものを石にしてしまうのでわないかと思うほどの美しい海色の瞳、思わず見入ってしまういそうな鮮やかな桜色の唇、スラッと伸びた白くて細い綺麗な手足、だが細いだけではなくしつかりと出るところは出ている、100人にきいたら100人が間違えなく美少女と答えると言っても過言ではないほどの美少女が清々しいくらいに胸を張り、まさしく凜とした姿で立っていた。

「エステル・・・しかたがないだろ、寝坊しちゃって・・・」

すでに学園指定の制服をきちんとした着こなし方で着ており、同じく学園指定の鞆を持ち、いつでも学園に向かえますよ!ってな感じで立っているエステルに負い目を感じながらエステルに聞こえるか聞こえないぐらいの声で言った。

「はぁー、寝坊?今日は何の日かわかって寝坊しているの?」

ちゃんと聞こえていた、物凄い顔で睨まれる。

「わかってるよ」

目を合わせない様にして言う、

「いいえわかっていないは、いい今日はウェンディル学園の入学式の日なのよ」

「だからわかってるよ」

そう、今日はウェンディル学園の入学式の日、だからみんな朝から大事な日だとか、遅刻を気にしているのだ、確かに入学式の日早々から遅刻するのはいろんな意味でヤバイと思う。

「わかってるならさっさと朝食を食べて準備しなさい」

物凄い怒声で言われつついつい縮こまってしまっ

「わかったよ」

急いで朝食の続きを食べ始めた。

「じいや学園に向かうから、すぐ馬車を用意して」

「わかりましたお嬢様」

そう言つとじいやはこちらにお辞儀をし部屋を出て玄関に向かった。

じいやが部屋を出るとエステルが僕の方にどんと近づいて来た。

とっさに僕は身構える。

目的は僕ではなかった僕の横を素通りし、後ろに立っていた友里の前に行き、

「友里、学園に行くわよ」

と言い友里の手を掴んだ。

友里は最初は驚いていたもののその手を丁寧に離し申し訳なさそうに言った、

「申し訳ありません先に行ってくださいお嬢様、私は敬太様を待つと一緒に学園へ向かいますから」

「え!？」

エステルは少しビククリした顔になる。

「いいわよ友里こんな入学式の日まで寝坊して、呑気に朝食を食べているバカなんかほつといて」

まったくこちらを見ずに言った。

(イラ)

「バカって誰のことだよ」

「あんたに決まってるじゃないバカ」

逆に凄いと思ってしまっほどのジト目でこちらを睨んだ。

「僕はバカじゃない」

「うるさいわね、こんな大事な日に寝坊するなんてバカがすること

」

(イライラ)

「だからバカって言うなよ」

「うるさいわねじゃあバカはやめてあげてアホって呼んでもいいわ」

「だから!・・・もういいよ」

これ以上続けてもおそらく言い負ける、心に深い傷が付く前に僕は言うのをやめた。

「お嬢様馬車の用意ができました」

いつの間にかじいやが部屋の扉の前に立っていた。

「友里、本当に私と一緒に学園に行かないの？」

「はい、申し訳ございません」

「こんなバカ本当にほつといてもいいのよ」

「そんな訳にはいけません、本当に申し訳ありませんが先に行ってくださいお嬢様」

「わかったわ、友里、今日は私が新入生代表として話をするんだから、友里には絶対見て欲しいから入学式が始まる時間までに必ず来てね、いざとなったらこんなバカ置いておいても来てね」

そう言いエステルは部屋を出ようとして立ち止まり、こちらに振

り向いた。

「あと、何回も言ってるでしょ、お嬢様禁止！私のことはエステル
って呼んでって」

そう言いエステルは部屋を出て行った。

「本当エステルはうるさいな、何がバカだよ昔は泣き虫でもっと可
愛らしかったのに」

（昔のエステルはもっと体も小さくてひ弱な感じで守ってあげた
くなるような女の子だった、それがいつからだろうか僕を見かける
度にまるで目の敵のように悪口を言ってくる、ホント口うるさくな
った、・・・あんな風になってしまったのはいつからだろうか。）

「はぁー、また言ってしまったわ」

馬車の中でエステルは大きな溜め息をついた。

本当はもつとちゃんと話をしようといつも思っているのに今日み
たいに寝坊したり、ついあのダラけた感じをみるといつもイライラ
してすぐに悪口を言ってしまう。

「私だってもつと普通に話をようと思ってるのに、でもいつから
だろうケイタがあんな風になったの」

（昔のケイタとてもしっかりしていて、強気な性格をしていた、
弱虫でいつも泣いてばかりいる私の手をいつも引っ張ってくれてい

た、それなのに今じゃ毎日のように寝坊したり、私が少し強く言う
とすぐに縮こまってしまふ、そう今じゃ昔の頃の強気な性格と正反
対の弱気な性格をしている。(

「ガタン」

馬車が止る、

「お嬢様、学園に着きました。」

じいやの声で我に返る。

「わかったわ」

「そんなことより今は入学式のこと集中しなくちゃ」

そうつぶやいて馬車を降りた。

「敬太様何ぼーっとしてらっしゃるのですか、このままだと本当に
入学式遅刻しちゃいますよ！」

そう言われながら肩を揺らされた。

ハッ和我に返る。

「い、い、い」

慌てて朝食の残りのパンを口に入れる。

「ふう、ふうー」（じゃあ、行こーか）

鞆を持って友里の方を向く。

「はい」

友里に少し笑われたが気にしない。

玄関を出ると表にはもう馬車が用意されていた、おそらくじいやがエステルの馬車を準備をする時ついでに遅刻ギリギリになってしまったらと予測して俺達の分の馬車も準備しといてくれたのだらう、

（ナイス判断だぜじいや！）

友里と一緒に馬車に乗る。

「急いで学園まで」

友里が運転をする使用人に言う。

「はい、かしこまりました」

二人を乗せた馬車は学園に向かって走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5622y/>

姫 > 勇者

2011年11月27日05時49分発行